

## “The Open Boat” における人間の弱さ

### The Weak Nature of Characters in “The Open Boat”

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

山 本 一 夫

Kazuo YAMAMOTO

北九州工業高専

(平成22年9月30日受理)

#### はじめに

Stephen Crane (1871-1900) の短編 “The Open Boat” (1897) では、本文に先立って、次のような副題が書かれている。

*A Tale Intended to be after the Fact:  
Being the Experience of Four Men  
from the Sunk Steamer Commodore (421)*<sup>1</sup>

副題によれば、この短編は汽船コモドア号から脱出した4人（彼を含む）が経験した事実に基づく物語である。したがって、脱出後の彼の遭難が物語の内容に色濃く反映されているのである。

その遭難の背景を概観してみたい。アメリカの南北戦争を題材にしたクレインの *The Red Badge of Courage* (1895) は、出版されるやいなや、彼を一躍有名にさせるほど好評を博した。<sup>2</sup> その彼は、新聞記者として、実際の戦争を自分の目で観察したいと思っていた。そのチャンスが彼にめぐってきた。それは、スペインからのキューバの独立運動を取材することであった。この独立運動を助けるため、アメリカからフィリバスターと呼ばれる船が、スペインによる封鎖をかいくぐってキューバへ向かったのである。そのうちの1隻が、総トン数178.25トン、全長122.5フィート（約37メートル）のコモドア号である。1896年12月31日、クレインを乗せた同船は、フロリダ州ジャクソンヴィル（Jacksonville）を出航したが、運悪く進路を誤って座礁した。その座礁を救ってくれたのは、フィリバスターを取り締まっていたアメリカの監視船であった。監視船はコモドア号の続行を黙認した。

しかし、翌日コモドア号は、座礁のときの船底の亀裂が原因であったのか、その船底から浸水して翌々日沈没した。コモドア号が浸水したとき、早速クレインは機関室に駆け込んで水の汲み出しに活躍した。<sup>3</sup> 精力的な働きもむなしく、彼は3人の乗組員（船長 Edward Murphy, コック Charles B. Montgomery, 給油係 William Higgins）と一緒に脱出して小舟に乗り、1月3日の朝に救助されるまでフロリダ海岸沖の寒い荒海でこの世の地獄を見るような苦しみを経験したのであった。小舟の中の限られた狭い空間で、彼らは前方から来襲する大波に対応しなければならなかった。結果的には、給油係以外の者は、海岸で救助された。

“The Open Boat” はこうした事実を再現しているが、そこでは狭い小舟の中で悪天候に左右されながら孤軍奮闘しなければならない人間の弱さが認められる。ここでは、この弱さがどのように描かれているのかを考察したい。

## 1

第1章の冒頭は次のように描かれている。

None of them knew the colour of the sky. Their eyes glanced level, and were fastened upon the waves that swept toward them. These waves were of the hue of slate, save for the tops, which were of foaming white, and all of the men knew the colours of the sea. (421)

10フィート（約3メートル）の小舟にいるのは、沈没船から脱出した4人 — 船長（the captain）、新聞記者（the correspondent）、給油係のビリー（Billie）、コック（the cook） — である。彼らの置かれている精神的状況が示されている。それは、空の様子を見る余裕が全くなく、目の前に押し寄せてくる波だけを絶えず注意しなければならない緊張感である。なぜなら、この小舟が乱暴で無情な波に飲まれないように絶えず対処する必要があるためである。

その後、小舟にいる4人の位置と心境が描かれている。コックは、小舟の底にしゃがんで、彼と海を隔てている6インチ（約15センチ）の船べりを見ている。ビリーは、2本あるオールの中の1本で漕ぎながら、時々船尾から入って来る水を避けている。クレインの代弁者である新聞記者は、もう1本のオールで漕ぎながら、今の状況を思案している。腕に怪我した船長は、沈没したコモドア号が脳裏にあり、意気消沈した様子を示している。そして忘れてならないのが、彼らの心境を述べて、物語を進行させる語り手である。彼は、後に救助されて4人の遭難事件を執筆するクレインの代弁者でもある。

4人の現状が、跳ね回る野生の馬の背に座っている状態にたとえられている。小舟の中という限られた世界の中で生き抜くため、彼らは前方から情け容赦なく襲って来る波に、まるで乗馬したような形で命をかけて闘わなければならなかった。それは、小舟で漂流した経験のない人々にとって想像を絶する苛酷な闘いなのである。その点で、彼らには狭い小舟の世界でしか身動きできない弱さがあった。

夜が明けると、コックと新聞記者は、水難救助所（a life-saving station）と水難避難所（a house of refuge）の違いを議論する。コックは、“There’s a house of refuge just north of the Mosquito Inlet Light, and as soon as they see us they’ll come off in their boat and pick us up.” (423) と述べる。ところが、船尾にいる給油係から “Well, we’re not there yet, anyhow,” (423) とたしなめられと、コックは “perhaps it’s not a house of refuge that I’m thinking of as being near Mosquito Inlet Light; perhaps it’s a life-saving station.” (423) と考えるようになる。第1章の終わりは、会話の内容から察すると、小舟の4人がそのうち救助される希望を心の片隅に抱いている情景を伝えている。

第2章の冒頭はこうした情景を受け継いで、船長、新聞記者、給油係、コックの4人が必死になって波しぶきを切り抜ける場面を描いている。語り手が “To express any particular optimism at this time they felt to be childish and stupid, but they all doubtless possessed this sense of the situation in their minds.” (424) と述べるように、4人は救助されると心の中で思っている。へさきにいる船長は3人に向かい、“Do you think we’ve got much of a show now, boys?” (424) や、“we’ll get ashore all right.” (424) と言って、職業柄できるだけ冷静に周囲の状況を判断しようとする。こうした4人の気持ちは、生命の危機にさらされ、どうにかして助かりたいという弱さの裏返しなのである。

その後小舟の男たちは、どこからともなく飛んで来たカモメの目つきに悪い不吉さを感じながらも、この鳥がこれ以上付きまとうのを止めてホッとす。褐色の海草が静止している状態に目が留まると、彼らは小舟が陸に近づいていると思う。周囲の出来事に一喜一憂していた折に大波を切り抜けたとき、船長は注意してへさきに立ち、モスキート・インレット灯台が見えたと言う。コックも灯台が見えたし、陸に背を向けていた新聞記者もその存在にやっと気づく。生きるのに明るい兆しがあると、彼らは、大きな波しぶきが小舟内に入り込んでも元気よく行動する。そのことが、第2章の終わりで次のように書かれている。

“Bail her, cook,” said the captain, serenely.

“All right, Captain,” said the cheerful cook. (426)

船長とコックの会話には救助の期待感がうかがわれる。副詞 “serenely” と形容詞 “cheerful” が示唆するように、船長はその期待感からくる嬉しさをできるだけ抑えて冷静になろうとしているし、コックは同じような嬉しさそのものを表情に示している。

4人全員はこのような救助の期待感を共有していた。このことが、小舟の中にいる彼らの間に自然と連帯意識を芽生えさせる。第3章の冒頭では、語り手がこの連帯意識を次のように述べている。

It would be difficult to describe the subtle brotherhood of men that was here established on the seas. No one said that it was so. No one mentioned it. But it dwelt in the boat, and each men felt it warm him. They were a captain, an oiler, a cook, and a correspondent, and they were friends—friends in a more curiously iron-bound degree than may be common. The hurt captain, lying against the water-jar in the bow, spoke always in a low voice and calmly; but he could never command a more ready and swiftly obedient crew than the motley three of the dinghy. It was more than a mere recognition of what was best for the common safety. There was surely in it a quality that was personal and heart-felt. And after this devotion to the commander of the boat, there was this comradeship,... (426-27)

小舟の中では、男たちの誰もが口に出さなくても、心の暖まる友情、言い換えれば、心の触れ合う性質のものが漂っていた。その大きな原因は、4人全員がいがみ合うことなく助け合っていることと、3人（新聞記者、給油係、コック）が、腕を負傷していたとはいえ、船の仕事に対して経験豊かな船長を指揮官として信頼していることである。上の描写は、この秩序ある世界を熱の入った語り手の口を通して伝えている。

他の3人からの信頼を察知する船長は、できるだけ新聞記者と給油係りのオール漕ぎを楽にさせるため、帆の代用としてオーバーを申し出る。給油係と新聞記者がオーバーをオールの端に張ると、小舟は以前よりもスムーズに進んだ。

このように、船長をリーダーにして小船の世界は秩序づけられている。そのうち、モスキート・インレット灯台の姿が次第に大きくなり、彼らには空に小さな灰色の影を映しているように見える。オールを漕いでいる者でさえ、この影を一目見たいという気持ちを抑え切れなかった。この短編の書き出しが示していたように、遭難した当日の夜半、4人は空の色を見る余裕さえなかった。ところが、翌日、助かる望みがでてくると、オールを漕ぐ給油係のビリーは、空の色ばかりではなく、陸地も見えてくるのを強く意識するようになる。語り手は、隣にいる新聞記者がそう判断したことを伝えている。

ついに陸地が男たちの視野に入った。相変わらず波が襲って来るとはいえ、風の力が弱まり、給油係と新聞記者はオールを以前よりも高く支える必要がなかった。船長は、“I suppose we’ll have to make a try for ourselves. If we stay out here too long, we’ll none of us have strength left to swim after the boat swamps.” (430) と言って、先の見通しを考え発言する（このとき、彼の発言内容が後に現実のものとなるのを誰も知る由もないが）。次第に灯台が高くそびえているのがわかったので、船長も給油係も、もうすぐ救助隊の連中が助けに来ることを期待する。はっきりと陸地が姿を現すようになる。風向きが北東から南東へ変わり、灯台へ達することができないとわかって、男たちは疑心暗鬼が消え去り、1時間以内に陸地に到着できるであろうと考える。新聞記者はふと上着のポケットから8本のタバコを取り出し、そのうち4本が海水に濡れていなかった。誰かが3本のマッチを差し出し、4人はタバコをスパスパと吸い出す。彼らは、間もなく救助隊が来ると確信しているのである。

しかし4人の目に留まるのは、避難所や人影ではなく、小さな一軒の家だけである。その事実を知って、彼らは自国の救助隊員が自分たちの存在に気づかないことを激しく非難する。語り手は、彼らが心の中で怒り狂って何を考えているのかを次のように述べている。

“If I am going to be drowned, — if I am going to be drowned — if I am going to be drowned, why, in the name of the seven mad gods who rule the sea, was I allowed to come thus far and contemplate sand and tree? Was I brought here merely to have my nose dragged away as I was about to nibble the sacred cheese of life? It is preposterous. If this old ninny-woman, Fate, cannot do better than this, she should be deprived of the management of men’s fortunes.

She is an old hen who knows not her intention. If she has decided to drown me, why did she not do it in the beginning and save me all this trouble? The whole affair is absurd. — But no; she cannot mean to drown me. She dare not drown me. She cannot drown me. Not after all this work.” Afterward the man might have had an impulse to shake his fist at the clouds. “Just you drown me, now, and then hear what I call you!” (430-31)

語り手が4人の心境を代弁して表しているのは、やるだけのことをやった結果の努力が報われず死を迎えるのであれば、人間の運命を操る海の女神はなんと意地悪で残忍であるか、ということである。彼らが抱いているのは、程度の差こそあれ、思うように進展しない救助に対する恨みつらみを、この女神にぶっつけているのである。ここには、自然に対して、自分たちの力だけではどうすることもできない人間の弱さが書かれている。したがって上の文章は、この弱さがあるため、4人が絶えず死の恐怖に直面しなければならない心境を表しているのである。

このときに襲って来た大波は、小舟を転覆させるほどのすごいものであった。大波に対処する名人である給油係のビリーは、小舟が今のままでは3分もたないし、この位置から泳いで海岸へ行くこともできないと判断し、船長の同意を得て、小舟を沖へ戻すことに成功する。

沖合に出た小舟の中では、ビリーと新聞記者は交代でオールを漕ぐが、うんざりする単調な仕事は人間の想像を絶するものであった。再び海岸線に存在するものが小船の連中の視野に入る。歩いたり立ち止まったりして、手を振っていたが、結局あちらの家へ向かう人の姿であった。次に、自転車に乗っていたが、もう1人の男と顔を合わせ、一緒にこちらに手を振っているだけの人の姿であった。さらに、小船みたいで車輪の付いているものが海岸に近づいていた。それは救命艇だと思われたが、大きなホテルのバスであった。これらすべての目撃は、彼らを助けに来てくれるきっかけにならないのである。その事実がわかると、4人はすっかり打ち沈み、小舟は静かな夜と真っ黒な高波の中で、不気味な沈黙に包まれる。

## 2

遭難から2日目の夜に、漕ぎ手としてのビリーと新聞記者がどのように描かれているのかに注意を払ってみよう。小舟は、疲労困憊した彼らの伸ばした足がへさきにいる船長の足に触れるほど狭い空間であった。2人の漕ぎ手が考えたのは、1人が力尽くまで漕いだ後、舟底にある海水の寝床で眠っている相手と交代することであった。ビリーは、眠くて意識がもうろうとしても、オールを漕ぎ続ける。その後、彼が“Will you spell me for a little while?” (437) とおとなしい声で言ったとき、目を覚ました新聞記者は“Sure, Billie,” (437) と返事して、オール漕ぎを快く引き受ける。波のうなり声が聞こえると、いきなり高波が小舟に押し寄せて来る。眠っているビリーは起き直り、新たな寒さのため体をぶるぶる震わせる。“Oh, I’m awful sorry, Billie” (438) と言って新聞記者は謝ると、“That’s all right, old boy” (438) と応えて、再び横になり眠ってしまう。この短編は、既述した海上での友情を中心に描かれているのである (Bender 68)。しかしそこには、押し寄せて来る波にうまく対応するしかない彼らの無力さも表現されているのである。

語り手は、救助される機会が見出せず、人生に絶望した新聞記者の心の状態を次のように報告する。

When it occurs to a man that nature does not regard him as important, and that she feels she would not maim the universe by disposing of him, he at first wishes to throw bricks at the temple, and he hates deeply the fact that there are no bricks and no temples. Any visible expression of nature would surely be pelleted with his jeers. (439)

自然や宇宙は、まるで人間の運命に無関心であるかのように存在する。そうした自然や宇宙の圧倒的な力と比べると、人間の行使する力は微々たるものである。宗教の力でさえ、人命の助けにならない時があることが示唆されている。上の描写は、八方ふさがりの状態に陥った新聞記者の極限状況を表しているのである。

そんなとき、新聞記者の脳裏に次のような詩句がかすめる。



*A soldier of the Legion lay dying in Algiers;  
There was lack of woman's nursing, there was dearth of woman's tears;  
But a comrade stood beside him, and he took that comrade's hand,  
And he said, "I never more shall see my own, my native land." (440)*

これは、1人の外人部隊の兵士が異国の地アルジェ（アルジェリアの首都）で死を迎える前、戦友以外に看取る女性がここにいないことを示す場面である。子供の頃の新聞記者は、この詩句を何とも思わなかった。しかし今の彼は、この詩句の内容が“an actuality — stern, mournful, and fine”（440）となり、“a profound and perfectly impersonal comprehension”（440）であると実感する。それは、彼が死を現実のものとして考えるようになったことを意味する。

その後、オール漕ぎは新聞記者とビリーの間で交代される。夜が更けるにつれて、船長はコックに、大波の来襲を避けるため、小舟をもっと沖のほうへ向け、その大波が来たとき大声で知らせるように命じた。それは、船長が新聞記者とビリーを休ませるためでもある。オール漕ぎはコックから新聞記者に交代され、さらに新聞記者からビリーに交代される。新聞記者もビリーも快く同意したのである。この場面は、小舟の世界では、船長のリーダーのもとで、心身共に自由が非常に限られている弱い人間同士が助け合わなければならぬ一コマである。

### 3

遭難から3日目である。光り輝く朝、小さな小屋とその上にそびえる水車だけしか見えなかった。そこで、船長は小舟の中で会議を開き、“if no help is coming, we might better try a run through the surf right away. If we stay out here much longer we will be too weak to do anything for ourselves at all.”（442-43）と進言して、他の3人も彼の発言に服従する。

語り手は、4人を見下ろす風車の塔についての印象を次のように報告する。

This tower was a giant, standing with its back to the plight of the ants. It represented in a degree, to the correspondent, the serenity of nature amid the struggles of the individual — nature in the wind, and nature in the vision of men. She did not seem cruel to him then, nor beneficent, nor treacherous, nor wise. But she was indifferent, flatly indifferent. (443)

海上で自然と必死に闘う4人がアリたちの苦難にたとえられる。語り手は、4人に背を向けて立つ風車の塔が彼らに冷然とした態度をとる自然の象徴であると見なす。この自然そのものは、彼らに対して全くの無関心として存在する。語り手は、前夜の場合と同じく、自然を前にして無力な人間の弱さを伝えているのである。

ついに船長は覚悟を決めて、“she is going to swamp sure. All we can do is to work her in as far as possible, and then when she swamps, pile out and scramble for the beach. Keep cool now, and don't jump until she swamps sure.”（443）と他の3人に指示する。ビリーは大波の状態から、小舟の後ろを海岸に向けることを提案する。この提案を受け入れて、船長は“Now, remember to get well clear of the boat when you jump”（444）と発言する。3番目の大波が小舟に押し寄せた瞬間、4人は海に投げ出された。新聞記者は、舟底に残っていた救命帯を左手でつかんで胸に付けた。ビリーは先頭を切り、海岸に向かって泳いだ。コックも、救命帯を身に付けていた。後方で、船長は怪我をしていない手で、小舟の竜骨にしがみついていた。

やがて新聞記者は、一つの大波に持ち上げられ、運良く岸の方へ進んだ。この出来事を目撃した海岸の男がすばやく上着を脱いで走って来た。その男は、コックの体を岸に引き上げ、次に船長に目を向けたが、彼の指示でコックと同じようにして新聞記者を助けた。人々が救助に必要なものを持って次々と集まり、海からの訪問者を歓迎した。しかし、水を滴らせているビリーの死体が運ばれて来た。淡々とした彼の死の描写は自然の無関心さを表す（Gerstenberger 561）が、この結末は助かりたい一心で性急しすぎた彼の行動が招いたものである。ここにも、遭難して救助が期待されないとき、自然に対して従順に行動しなければなら

ない人間の弱さがあることを指摘できよう。

#### おわりに

“The Open Boat” は次のような場面で終わる。

When it came night, the white waves paced to and fro in the moonlight, and the wind brought the sound of the great sea's voice to the men on the shore, and they felt that they could then be interpreters. (447)

“the men on the shore” とそれを指す “they” は誰について言及しているのであろうか。ここではその点について考えてみたい。小舟の中にいた新聞記者は海岸の人々が4人の遭難者に気づいていないので怒りを覚えていたが、助けられた彼は海岸の人々から手厚い歓迎を受けた。この事実から察すると, “the men on the shore” と “they” は, 3人の生存者と彼らを目撃した陸の男たちに言及しているように思われる。新聞記者は, 小舟の中で心の触れ合う性質の友情を感じ取ったが, この種の友情を海岸にいる男たち(彼以外の2人の生存者を含めて)も共有することを願ったのであろう。この共有には, 一緒に苦闘した仲間のビリーの友情も含まれていると推定される。

こうしたクレインの願いが, “they felt that they could then be interpreters.” に暗に表現されていると判断される。少なくとも彼自身は遭難体験の解釈者になれると思ったので, 漂流中の新聞記者(彼の代弁者)らの言動と, 救助された新聞記者(同じく彼の代弁者)がその言動を語り手として説明する “The Open Boat” が完成されたのであると言えよう。このような短編の構造の主潮となっているのが, これまでの論考から明らかなように, 自然に対する人間の弱さなのである。

#### 注

1. この小説の論考については, 拙稿『『赤い武功章』におけるヘンリー・フレミングの人的成長』を参照。
2. “The Open Boat” からの引用はすべて *Stephen Crane* による。括弧内の数字はこの短編の頁を表す。
3. 彼の群を抜いた働きぶりについては, 『スティーヴン・クレイン』 170-71及び『スティーヴン・クレインの眼』 303-04 を参照。

#### 引用文献

- Bender, Bert. *Sea-Brothers: The Tradition of American Sea Fiction from Moby-Dick to the Present*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1988.
- Crane, Stephen. “The Open Boat.” *Stephen Crane: An Omnibus*. Ed. Robert Wooster Stallman. New York: Alfred A. Knopf, 1952. 421-47.
- Gerstenberger, Donna. “‘The Open Boat’: Additional Perspective.” *Modern Fiction Studies* 17.4 (1971): 557-61.
- 押谷善一郎. 『スティーヴン・クレイン—評伝と研究—』. 京都: 山口書店, 1981.
- . 『スティーヴン・クレインの眼』. 大阪: 大阪教育図書, 1995.
- 古賀元章・山本一夫. 「『赤い武功章』におけるヘンリー・フレミングの人的成長—原作と映画の比較分析—」『福岡教育大学紀要』 58号 1 分冊 (2009): 39-45.